

始



特248

602

孫中山先生の十年祭に際して

日本文化聯盟

特248
602



山先生の十年祭に際して



特248
602



孫中山先生の十年祭に際して



孫中山先生の十年祭に際して

我々は孫中山先生の十年祭を迎ふるに當り、感慨の頗る深きものがある。今日先生は新しき中華民國の建設者として、同國民から敬慕せられ、尊敬せられて居られることは云ふ迄もないが、先生が我國を深く理解し、且つ信頼し、相提携して東洋の平和と安寧を確立せんとして絶大なる努力をせられた事は案外知れ亘つて居らぬ様である。先生の眞意は、兩國民がその共通指導原理たる「道」を遵奉實踐することに依つて道義的に結合し、正しき意味に於ける共存共榮の實を擧げんことを希はれたことと推察する。故に孫中山先生の眞意が那邊に在つたかと云ふことを再吟味、再認識し、目前に迫り來れる中日問題の根本的解決を計ることは今日の急務と云はねばならぬ。

斯くの如き根本的な問題の解決は、單なる政治的方法、若しくは經濟的方法に依るべきもの

ではなくして、もつと精神的な文化的方法に依らねばならぬものと信ずる。近年我が邦も中華民国も姑く自己の高貴なる傳統より遠ざかつて、只管、西歐文明の輸入、吸收攝取にのみ忙はしく、其の爲に何時しか兩國間の本來の深き文化的關係が疎遠になつて了つた。換言すれば兩國の國際關係は次第に其の共通指導原理たる「道」から離れ、何時の間にか近代西歐諸國の指導原理たる「自由主義的個人主義」に依つて支配さるゝ様になつたのである。自由主義的個人主義が國際政治の原則として現はるる場合に於て、之をインターナショナリズムと呼ぶ。今日中日兩國の有識者はこのインターナショナリズムの正體が國際個人主義であると云ふことをつきとめて、其の缺陷に目醒め是に代るべきものとして「道」を實踐指導原理とする新しき國際主義を提唱しなければならない。是に依つて孫中山先生が意圖せられたところのものが如實に實現せられることとなる。孫中山先生が新しき中華民國の指導原理として、三民主義を樹立せられたのは、決して歐米思想を其の儘に模倣し、之に依つて中華民國を指導せんと欲せられた

二

からではない。其の精神は實に中華民國に固有なる、崇高なる儒教道德思想から生れ來つたものと思はれる。現に三民主義中、民族主義第六講に於て次の如き意味のことが述べられてゐる。我が中國人は歐米諸國を近來非常に進歩したものゝ様に思つて居るが、彼等の新文化なるものは、我等の政治哲學の完全なるに若かず。中國には更に一段高き系統的なる政治哲學がある。然るに未だ外國の大政治家も之を發見し得ないからして、その立派なものであることを唱導したことを聞かぬ。即ち大學に謂ふ、「格物致知誠意正心修身齊家治國平天下」之である。一個人の内容を完成することより始まり、一個人を内部から發揚して外に及ぼし、是を擴充し、天下に推到して止むを云ふ。彼様な精密な開展的理論は、外國の如何なる政治哲學者にも見當らないのである。之は我等の政治哲學の智識の中で獨有的實貝であるからして、之は必らず保存すべきものである。我等の祖先はこの誠意正心修身齊家の理論を實踐窮行したのであるが、我々が民族的精神を失つて了つて以來、この理論の實踐

三

も失はれて了つた。従つて我が國人がこの章句を讀んでも、只だ口頭禪にしか過ぎなくなつて了つた。彼等は其の深き意味を理解し、其の妙味を採つて了得することが出来ないものである。斯くの如く、中國人はこの幾百年間、修身齊家治國平天下の實踐を行はなかつたからして、外國人は中國人は國を治むるの力がないを觀察し、遂には共同管理説迄持ち出す様になつたのである。今日國民の大多數は修身的教養に甚だ缺乏してゐるから、一舉一動の小事に於ても極めて注意を拂はねばならないのである。

四

果して然らば現代の中國人たるものは、この孫中山先生の遺訓に立ち戻り、大いに反省せねばならぬと思ふ。全く孫中山先生の意圖せられたところのものは霸道にあらずして、王道の新しき發揮であつた。従つて中華民國が霸道的な排日運動を行つたり、排日教育を施すことは、孫中山先生の意志に違ふことであり、先生の遺靈に對して申譯が立たなくなる。實際中華民國の傳統的道德は、古來「仁愛互助」の徳性を涵養することを主たる目的として來た。故にこの立派

な精神に反し、徒らに偏狹なる排外思想を養成するが如きは、全く精神的自殺行爲であると云はねばならぬ。個人々々の關係が「まこと」に根ざさねば永續し得ない様に、國家と國家との關係も深い相互の信頼の上に立たなければ決して繼續し安定するものではない。孔子は政治に於て信頼が如何に大切なものであるか云ふとを力強く説かれてゐる。論語に次の如き言葉がある。

子貢政を問ふ。子曰く。食を足らす、兵を足らす、民之を信す。子貢曰く。必らず已むを得ずして斯の三者より去らば、何を先にせんかと。曰く。兵を去らんと。子貢曰く。必らず已むを得ずして斯の二者より去らば、何を先にせんかと。曰く。食を去らんと。古より皆死あり、民信なくんば立たず。

即ちこの「信」が中日兩國間を確りと結ぶ道義的紐帶でなければならぬ。而して此の「信」を樹立するが爲めにはさうしても兩國が近代西歐に發生して東漸し來れる功利的國際個人主義の思想的桎梏を打ち破り、道に立脚する東洋的國際的關係を新に確立しなければならぬ。

五

最近東京朝日新聞の特派員が盧山に於て蒋介石氏と會見し、日支提携の根本策に就き忌憚なき意見の交換を行つて居る。其の際「日支兩國の現状を根本的に打開する良策ありや」との問いに對し蒋介石氏は、「自分は何時も日支兩國の現在の難局を打開する根本原則は、道義の二字に盡きることと思つて居る」と答へて居る。(昭和拾年二月拾七朝日新聞朝刊所載)この蔣氏の意見は全く孫中山先生の眞意に合致するものである。願くば蒋介石氏が誠意を以て此の高明なる意見を如實に實現せられる様、努力精進せられんことを祈つてやまない。

翻つて我が邦に就いて考へるのに、我が國民も一切の行きがかりを棄て、深く反省しなければならぬのである。長くも 明治天皇は新日本の首途にあたり、五箇條の御誓文を發せられ其の中に於いて、「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」を宣はせられた。我が國民はこの御聖旨を奉戴して只管ら西歐の文明を吸收擷取し來つたのである。然るに我が國民は何時の間にか「知識ヲ世界ニ求メル」を云ふことは「大ニ皇基ヲ振起スル」と云ふ本來の目的を實現

するための手段であつたと云ふことを忘れて了つたのである。茲に我邦思想混亂の眞因があり又茲に我が邦文化の危機が胚胎する。今や我が國民は一大反省を行ひ今迄殆んど盲目的に輸入し來れる西歐の諸思想を吟味清算して、その採るべきものは之を採り、その棄つべきものは之を棄て、大いに皇基を振起すべき重大なる時機に逢着してゐる。皇基の振起とは、即ち眞正なる日本精神への自覺であり、眞正なる日本精神への自覺とは 天皇道、即ち皇道への自覺に外ならない。而して皇道への自覺とは、長くも「道」其のものを御自身に具現せられ、絶對的創造愛さながらに祭政一致の政治を行はるゝ 天皇に、國民の凡てが歸一信順隨從して、天壤無窮の皇運を扶翼し奉り先づ我が邦を「一人にして其の處を得ざるものなき」家族國として完成し更に進んでは他民族の個性、天分、使命を助長完成せしめ、今日に於ける弱肉強食の世界を變じて一大家族みなさねばやまぬ皇民意識への自覺である。この雄大雄渾なる日本民族の理想は 神武天皇建國の詔勅の中に極めて鮮かに表明せられて居る。即ち「上ハ則チ乾靈ノ國ヲ授

ケ給フ徳ニ答ヘ下ハ則チ皇孫正ヲ養ヒタマフ心ヲ弘ム」の高き理想の端的なる表現である。國際聯盟離脱に關する御詔勅に於て、今上陛下は我が建國の理想を再認識し給ひ「愈信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ」と仰せられたのである。斯くの如く皇道こそは悠久なる古より連綿として我が邦三千年の歴史を貫いて今日に及び、更に永久未來に向つて變らざる大和民族本來の指導實踐原理である。今日我が邦は聯盟を脱退し、更に華盛頓海軍軍縮條約を廢棄したる結果、いやが應でも自主的立場に立つて國際政治を行はざるを得ない立場に置かれてゐる。今迄東洋に於ける國際政治は近代自由主義に源を發する妥協的功利的國際主義を樞軸として展開せられて來た。即ち我が邦も中華民國も共に此の種の個人主義的國際政治原理に遵つて、相互の國際關係を律して來たのである。然るに今日世界に於ける國際情勢の急激なる變轉は、中日兩國をして從來の國際關係を根本的に建直すべきことを餘儀なくせしめてゐる。この秋に際して、我々が深く想を致すべき一大問題は、新に兩國の國際關係を

律すべき正しき指導原理の確立である。我々は此の指導原理が、「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」との意味の道であることを確認する。道は時間ニ空間とを超へて、凡ての民族に妥當する普遍原理である。

中華民國の傳統的指導實踐原理は、大聖孔子に依つて完成せられた儒教の道であり、我が日本民族の傳統的指導實踐原理は、皇祖皇宗の遺訓たる惟神の大道即ち皇道である。而して此の二者は共に絶對的創造愛たる仁の實現を目的とするものである。若し此の「道」を新に國際政治原理として構成し確立するならば、即ちそれは功利ニ打算とを基調とする西歐近代の個人主義的國際主義に對して、道德ニ信義とを基調とする東洋流家族主義的國際主義として顯現する。將來兩國の國際關係が、この誠に根ざす國際家族によりて律せらるる曉に於ては、必ずや兩國民は次第に心底より了解し、信頼し、提携すべく、其の結果多年の懸案たりし政治問題も、經濟問題も、技術問題も自ら解決せられるであらう。中庸に「誠は物の終始。誠ならざれば物無

し。是の故に君子誠を之れを貴しむ爲す。誠は自ら己を成すのみに非ざるなり。物を成す所以なり」と云ふ言葉がある。又西郷南洲先生の遺訓中にも「事大小と無く、正道を踏み至誠を推し、一事の詐謀を用ふ可らず。人多く事の差支ゆる時に臨み、作略を用ひて一旦其の差支を通せば、跡は時宜次第工夫出来る様に思へ共作略の煩ひ乾度生じ、事必ず敗るものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれ共、先きに行けば成功早きもの也」と述べてある。此等の言葉は何れも大いに味はねばならぬものである。要は文化問題であり、兩國民指導者の深き心術の問題である。

炯眼なる孫中山先生は既にこの事あるべきを洞察せられ、三民主義に於て大學の道を再興すべきことを主張せられたのである。従つて眼光紙背に徹するものは、三民主義が單なる排外的思想にあらずして、王道の近代的表現であると悟得するのである。然るに先生の後継者の一部は三民主義の眞精神を曲解し、之を功利主義的に或は共產主義的に解釋した嫌ひがある。今

日は凡てが大本に歸る時代である。我が國民も近代西歐に發源せる個人主義的自由主義を斷然清算して本來の皇道精神に立ち戻りつゝある。中華民國も同じく不純なる個人主義思想を脱却して醇乎たる本來の王道精神に立ち戻らんとしてゐる。聞く處に依れば、最近國民政府は孔子祭を復興し儒教精神の作興に努力して居ることである。是は洵に慶賀に堪へない處である。要するに兩國民の行ふ精神運動の目指すところは「道」の復興であり、且つその實踐である。

英明なる 明治天皇が指導し給ふた新しき日本が劃期的なる發展を行ひ、遂に世界の一大強國となつたのは、決して單に西洋を模倣せる爲めではなかつた。それにはもつゝ深い根據が存在するのである。最近我が邦に於て明治維新史が眞面目に研究せられたる結果、此の事が次第に明白となつて來た。即ち日本が今日の如き世界の強國となつた最も根本的な理由は 明治天皇が維新の初めに當り「惟神の大道」を復興し給ひ、之が實現の手段として西歐文化を攝取し、咀嚼すべきことを國民に發諭し給へるが爲である。長くも 明治天皇は斯の道を実現すべく國

民に率先せられて親しく範を垂れ給ふた。されば天皇は五箇條の御誓文に於て『我が國未曾有ノ變革ヲナサントスルニ當リ、朕身ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大イニコノ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ行ハントス、衆モコノ旨趣ニ基キ協心努力セヨ』と仰せられたのである。斯くの如く明治の新日本は、我が邦本來の指導原理たる皇道に即して展開せられた。さればこそ、我が邦は絶間なく生成發展して遂に今日に到つたのである。

孫中山先生は當時、日本に對して大なる尊敬を拂はれ、又信頼せらるゝ處が深かつたのである。三民主義中、民族主義第一講に於ても次の如き意味のこゝが述べてある。

我等の東方に一つの島國がある。東洋の英國も云へる國こそ、即ち日本である。彼等は大和民族と云つて居る。開國以來外國に併呑せられたこゝがない。この大和民族の精神は今に至るも尙失はれて居らない。其故に歐化東漸するに乗ずるも、歐風米雨の中にあつても科學の新方法を利用し、國家を發展せしめ、維新五十年にして即ち現在亞細亞の大強國と

して、歐米各國と相併馳して歐米人も敢て之を輕視しない。我が中國の人口は彼の國の人口に比すれば頗る多きに拘らず、今日尙列國から輕視せられつゝある原因は、即ち一は民族主義を有するのに、一は民族主義が無いからである。日本も維新前迄は國力甚だ衰微し所有領土も四川省一つだけの大きさに過ぎず、人口も四川一省に及ばなかつたが、外國の壓制的恥辱を受くるや、彼等は民族主義精神を發揮してよく奮闘し、五十年も經過せざるに強勢的國家となつたのである。我等は中國を強勢ならしむるには、日本が最も好き模範である。近代日本が忽然として興起し、世界に於ける一等國となつたのを觀て、亞細亞各民族は無限の希望を持つ様になつた。是れ以來白人のすることは日本人でもやれる、世界中の人種は顔色こそ異なるけれども、聰明と才智の點に於ては區別がない。今日では亞細亞に強國日本が存在するので、世界中の白人種は單に日本を輕視しないのみならず、又亞細亞人を輕視しなくなつて來た。其故日本が強勢になつたこゝは、大和民族が一等民族で

あるに云ふ光榮を享受したのみでなく、亞細亞全體も國際的に地位を高めた譯である。以前は歐洲人に可能でも、我等には不可能であると思つてゐた。しかし現在日本人が歐洲人に學んだ様に、我等も日本を學べば日本の様になれるし、將來は歐洲の様になると云ふことを知つたのである。

想ふに孫中山先生が民族主義と云はれた處のものは必ずしも近代西歐に發生せるが如き排他的なる民族主義を意味するものではない。それは寧ろ東洋精神に基き、民族と民族とが「道」に依りて心から相提携して一つの大きな國際家族を形成すべき原理であると解釋すべきものである。何れにせよ孫中山先生は日本の勃興が、東洋全體の平和の確保、就中華民國の更生に對し非常に大きな貢獻を爲したことを卒直に認められ、日本を心から禮讃せられたのである。

當時長くも 明治天皇は高き道義的立場より東洋の平和、否世界人類の平和を心から念願せられ給ふたのである。而して 明治天皇の崇高なる御世界觀をいやが上にも深からしむるに與

つて力のあつたものは東洋政治哲學の眞諦を御進講申上げた元田永孚先生である。嘗て元田先生は論語開卷の章句、「學んで而して時に之を習ふ、又悦しからずや」に就いて蘊奥を披瀝し奉つた。

右の御進講の趣旨を要約すれば次の如くである。

「論語は 應仁天皇の時に我が邦に傳はりたる書であつて、皇道の訓解として之を尊崇すべきものである。北畠親房卿の神皇正統記に於ては、神器の徳を訓じて之を智、仁、勇の三徳となし熊澤了介は其の「大學或問」に於て仁義の註解は「中庸」なりと述べてゐる。而して「中庸」の原本は「論語」であるからして論語を以て皇道の訓解を考へることは決して私言ではない。之は孔子の道なり、漢學なりと云ひ、或は聖人の道は儒道にして我が邦の道と異なる、我が邦の道は神道なりと云ふが如きは、皆道を知らざる論なり、道は天地人倫の大道にして我が先皇の道、神道はこの理の神妙なるを謂ふ。儒道とはこの理を講明するを謂ふ。先皇の道は孔子

の道、孔子の道は天地人倫の大道、天理人道に順へば即ち天下治まり、天理人道に違へば即ち天下亂る。毫も疑ひを容れざるところにして、今上陛下にこの章を信じて講筵を開き給ふの聖意、臣謹みて之を初めに講ぜざるを得ざるなり。孔子の所謂「學」は至中至誠の大本達道にして修身平天下の道德學なり。當世の所謂「學」は一科一科の學、異端末枝の謂ひにして、大本達道の學にあらず。抑々孔子の學は我が本然天良の心性を發覺し、人倫日用の道を盡して天理の極に達し、身を修めて以て天下を平かにするの道學なり。輒近西洋の理學、修身學、法律學、政治學、經濟學等皆精細を説くも、其の全體大用を備へ、一本を以て萬殊を貫くに至つては、實に宇内古今に通じて萬世の師たる孔子の學以外にはないのである。故に孔子の「學」を學びて根本既に定まりたる後に、法律學、經濟學等西洋の學問を學び、識見を博するは可なり。雖も、孔子の學問を後にする時には根本立たず遂には道德を損じ、人倫に悖り、身修まらず家齊はずして邦治まらざるなり。現今西洋諸國の、自ら文明國と誇るも其の心術正しからずして

風俗善良ならず、利を食り力を争ひ、其の害一にして足らず。學藝は益々開明して人心は益々狡點、學路中正ならざるの致すところ、其の大害を見るべきなり。

人君の學は天下を修むるを學ぶにあつて、天下を治むるは仁に止るのみ。然るに仁に止まらんを欲して心正しからざれば、仁に止まる能はず。之を正しうせんを欲して意識ならざれば心を正しうする能はず。意を正にせんと欲して天下の理に明かならざれば、意を誠にする能はず所謂明德を天下に明かにせんと欲せば、正心誠意、致知格物布て天下の理を明かにするに始まり、一旦己に克ち禮に戻りて而して後天下仁に歸するもの、これ人君仁に止まるの學問の次第順序にして、この論語開卷の章、「學んで時に之を習ふ」とはこの事なり。

凡そ孔子の學問は、本心の發覺、了悟を主とす。それは強ち博愛にもあらず。經歷にも依らず、慎んで思ひ篤く行ふ中に我が心の靈明發覺して、天下の道の道理豁然貫通、了悟に至るもの、これ道德學の功驗であり、西洋科學の四年、六年勉強して免許を受くるが如きものにあらず。

更に元田先生は論語孝弟の章、即ち「堯舜の道は孝弟のみ」の意義を進講せられて大要次の如く述べられてゐる。

「最近歐洲の學理を偏信し、政治は憲法に依つて成立するものであり、教育は論理法律諸科の藝業と看做し祖宗の仁徳今世の憲法政事に用ひられず。君徳と云へば僅かに帝室の慈恵に止まるのみ思想するは眞に道を知らず、徳を愆る者謂ふべし。それ教育なり、政事なり、憲法なり、刑律なり、一として民を治むるの器具にあらざるはなし。苟くも人を愛するの心なくして徒らに法制の末を整理するは、是れ徒法徒制にして、天下の治まらんことを求むるも豈得べけんや。」

斯くの如く元田先生は東洋聖賢の道に就き諄々として 明治天皇に御進講申上ぐる處があつた。かくて先生は明治日本の世界觀的基礎確立に絶大なる貢獻を爲されたのである。茲に近代

日本の劃期的發展の眞因が発見せられるのである。何故に當時中國を初めとして世界各國が我が邦を心より賞讃し信頼したかと云へば、それは新日本が「仁者に敵無し」と教へたる東洋聖賢の道の實現に只管精進し、邁進したるが爲である。孫中山先生が我が邦を信頼し親しく渡來せられて、兩國政治家の道に依る心からの提携を慫慂せられたのは、洵にさもあるべきことと推察せられるのである。然るに其後我邦の政治家の多くが此の道を忘れ功利的妥協的個人主義を基調とする近代思想に追従し、又中華民國の當事者も何時しか孫中山先生の眞意を忘れて次第に邪道に陥り、或は經濟萬能の功利主義に共鳴し、或は階級的闘争を主張する霸道的赤化主義に迎合して、有害なる排外政策を行ふに至り、兩國の國交に大混亂を來したことは、洵に嘆はしい次第であるから、中日兩國の有識者はこの際從來の嫌棄より脱却し、西歐近代の個人主義に胚胎する自由主義等の道德的缺陷に目醒め、新に東洋本來の精神生活原理たる「道」を復興して、其の上に新しき道義的國際關係を樹立しなければならない。中庸に「誠は天の道也之を誠にする

は人の道也」を述べてある。之れは今日兩國指導者のまさに銘記すべき言葉である。新しく之を解釋すれば、潜在意識として心の奥底に隠在してゐる「まごころ」を精神的緊張によりて顕在意識たらしむることである。之が爲めに孫中山先生の十年祭は洵に絶好の機會であつて、この機會に於て兩國民が從來の悪因縁を一擲し、新に精神的に相提携し、東洋永遠の平和を確立して共存共榮の實を擧げ、更に進んでは世界人類の平和に貢献すべきである。是が爲には暫く兩國民が皮相なる政治經濟の利害問題より離れお互に精神問題、文化問題に就いて深く想を潜めなければならぬ。

抑々「一」が先づ存在し、それより「多」が派生するのが東洋精神であり、反對に「多」が先づ存在し、然る後此の「多」が相寄り相集つて「一」を人爲的に造り出すのが西歐精神である。此の點をはつきり理解し、把握するにあらずんば、今日に於ける世界の文化問題は解決せられない。詳言すれば東洋精神に於ける「一」とは「道」そのものを意味する。而して「多」なる

人間は何れも自己の純粹意識の中に道を活かし得るが故に、「多」の相互關係に於て極めて自然なる共通道徳原理が働くのである。さればこそ「多」は相互に信頼し、「一」に結ばれるのである。而して各人の心の中に普遍實踐原理たる「道」の自覺が鮮かとなる場合に於て、其處に一つの無理のない秩序が確立せられる。かくてこそ初めて各人は皆其の處を得、安心立命して共存共榮し得るのである。東洋的なる平和は斯くの如き道へ凡ての民族が誠を以て隨順することに依つて初めて可能となる。これに反して西歐精神に於ては、先づ第一に「多」なる獨立個人が利己的立場に於て相互的に對立してゐるのである。それは所謂「萬人の萬人に對する戦」の状態である。しかしこれは不安であるから互に相寄り相集つて妥協し外面的に平和なる「一」の共同生活を營まんと欲する。従つて彼等は表面的に平和生活を爲し、又外面的には統一維持して居るけれども、彼等の心境、又は精神状態は以前と殆ど變らず、潜在的に御互に敵意を藏して居る。詳言すれば彼等が平和的に寄合世帯をしてゐるのは、其の方が一人一人で對抗して居

るよりも結局得であり、利益であるからと云ふ考から出てゐるのである。彼等が大體に於て物質主義的であり、精神主義でないのは之が爲である。従來の西洋流國際主義なるものも、矢張りこの根本精神より生れたものである。即ち國際主義とは種々の民族がバラ／＼に對立對抗して、經濟的利益を追求するよりも、お互に妥協し、或る點迄は共同的に行動した方が結局より能率が上ると思つて、一緒になる主義である。率直に言へば今迄歐米諸國が東洋、就中華民國に對して遂行した國際政策は、此の種の國際主義の最も露骨なる現はれであつた。何故に彼等が中華民國に對して大きな關心を有するか云ふと、それは中華民族の個性、天分、使命を助長し、完成せしめて其の處を得せしめてやるに云ふ深い王道的思ひ遣りからではなく、中國の人口は四億もあるから彼等に自國の製品を賣りつけ、又投資するに、非常に金が儲かると云ふ主なる動機から出てゐるのである。勿論其の外に各種の文化事業や、宣教事業も行はれてゐるが、其れは寧ろ第二義的な事業である。従つて中國に對する彼等の政策は 明治天皇が遂行せ

られた「道」に依る國際政治は本質を異にするものと云はねばならぬ。世界大戰後、多大の期待を背負つて生れた國際聯盟も不幸にして略同様なるイデオロギイに依りて動いてゐる。私は嘗て三ヶ年聯盟事務局に在動し、親しく其の實際に接することが出来た。聯盟は其の事務的能率の點に於ても又國際行政の技術に於ても非常に優れた機構である。しかし遺憾ながら聯盟には「道」の如く凡ての者が心から信奉し得る共通の指導の原理が現實に働いて居なかつた。それは結局各國の寄合世帯であつて、各國代表は心から打ちとけるこゝが出来なかつた。其處に聯盟の致命的缺陷が存在する。さればこそ聯盟離脱の詔勅に於て、「不幸ニシテ聯盟ノ所見之ト背馳スルモノアリ」を仰せらるるに至つたのである。又海軍軍縮條約と共に華盛頓に於て締結せられた中國に對する九ヶ國條約も、大體に於て此の種の功利的國際主義の産物の如く考へられる。言葉は極めて平和的であり、婉曲であるけれども、九ヶ國の領土保全、門戸開放、機會均等なる原則は、列國の中國に對する功利主義的態度をカモフラージュせるが如き感と與

へるのである。而して日本もこの條約に参加したのである。

二〇

之は或は過去に於ては已むを得ないことであつたかも知れない。然し日本精神に目醒むる我々は、天皇の聖旨に遵ひ高貴なる皇道の立場より九ヶ國條約の本質を再検討すべき必要があるのではあるまいか。勿論中國が斯かる種類の國際條約を默認したのは當時に於ける同國政府當局者が其の本來の道より離れて功利主義に走り、「夷を以て夷を制する」の消極的霸道政策を執つた結果と謂へる。しかし中國の隣接友邦たる我が邦が道を遵奉して、之を實踐指導原理とする以上は、この状態を安閑として見て居るわけには行かないであらう。我が邦は「大義ヲ宇内ニ顯揚スル」と言ふ、今上陛下の御聖旨に従ひ高き國際正義の立場より中國國家の眞の獨立と福祉とを確保すべく努力せねばならぬ。我々は昭和の聖代を謳歌して居る。「昭和」なる言葉は書經の「百姓昭明萬邦協和」より出でたるものである。此の「萬邦協和」こそ今日に於ける我國外交の要諦である。孫中山先生も五族協和の理想を昂揚せられた。此の點に於て、先生の思

想と昭和日本の思想とは符合するものであつて、洵に同慶に堪へぬ處である。

最近紐育のヘラルド・トリビュン紙は米國著名の政治批評家ワルタア・リップマン氏の「米國は極東問題に對して現實主義政策を採用す」と言ふ論説を掲げてゐる。其の中で氏は大要次の如く説いてゐる。

「過去に於て、ローマ・カルタゴは抗争し、第十六世紀に於て英國とスペインは覇權を争ひ、又世界大戰前に於て英國と獨逸は大なる争鬪戦を演じた。而して多くの人々は將來日本と米國とが宿命的に衝突せざるを得ないと考へてゐる。既に大統領ウィルソン氏は日本が支那に提出した二十一ヶ條問題に對して強硬なる抗議を爲し、國務卿ヒューズ氏は華盛頓會議に於て日本に海軍比率を強制した。又國務卿スチムソン氏は滿洲問題に對し積極的に容喙した。國務卿ハル氏は滿洲に於ける日本の石油獨占に對して抗辯した。更に最近倫敦に於て開かれたる海軍軍縮豫備會議に於て、米國は日本の主張せる均等主義に反對し

二五

たのである。斯くの如く日本と米國は何時か衝突せざるを得ないといふ感を世界全體に與へてゐる。然しながら最近に至り米國だけが日本の矢面に立つて徒らに日本に敵意を抱かせることは甚だ不得策であると言ふ考へが起つて來た。抑々我々米國人が極東に於て有する權益は、英國の六分の一に過ぎない。又中國に於ける米國の投資額は、列強投資金額の十六分の一に過ぎない。又滿洲に於ける米國の投資は極めて僅かである。更に上海に於ける英國の利益は米國の七倍にも達してゐる。かく考へて見れば、米國だけが眞向より日本に反對し、西歐諸國全體の利益擁護者であるかの如き感を與へることは甚だ損である。故に我々は寧ろ日本の問題は之を一般的國際問題に轉化し、米國だけが責を負はぬ様せねばならぬ。他の西歐諸國をも勧誘して此の問題の解決を圖る方が餘程得策である」云々

このリップマン氏の論説は現時流行する功利的國際心理を露骨に現はしてゐる。其處には不幸にして何等の道義的色彩が無い。全々功利的立場を主張してゐるのである。リップマン氏は

日本は世界に對して帝國主義を遂行するものであると非難して居るが、之は自己の心を推して他人の心を測る事である。實際日本は何等米國と戦を構ふが如きことを考へてゐない、只從來の所謂國際主義が道義に根據せざることを指摘し、之が是正を要求してゐるだけなのである。最近齋藤駐米大使は「米國の國際政治學會の席上に於て日本の對支政策は西歐諸國の侵略から中華民國を擁護することを目的としてゐる」と斷言して多大のセンセーションを起した。然し、これは目醒めたる我が邦有識者の均しく感じて居る所である。何れにせよ個人主義的功利主義を基調とする從來の所謂「國際主義」は、其の美しき平和のイデオロギーにも拘はらず、事實上動もすれば勢力の強大なる國家が、勢力の弱小なる國家を壓迫搾取することを許すこととなるのである。恰も國內に於て、形式的に凡ての個人は自由平等なりと主張する自由主義、民主主義が實質に於て有産無産の階級を對立せしむる傾向を生ぜしむるが如きである。斯くの如き自由主義的國際主義の基本的缺陷を是正すべきことを標榜して、世界革命運動を起したのが

ルクス主義的ボルシェヴィズムである。ボルシェヴィズムは國家をブルジョア群とプロレタリア群に分ち、前者を打倒して世界にプロレタリア獨裁政治を強制せんを欲する。かくの如くボルシェヴィズムは極めて對立的なる階級的イデオロギーを指導原理として行動するものである。然し乍ら、斯くの如き階級的思想を以てしては、決して從來の國際主義の根本的缺陷を排除することは出来ない。それは結局血を以て血を洗ふことであり、其處には何等道義的なる力が働いてゐない。さればこそ我々は之に反對して東洋精神生活たる「道」を指導實踐原理とする新しき國際主義を提唱するのである。これこそ日本文化聯盟の對外活動「第五インターナショナル」が掲ぐる指導原理である。其處に於ては、最早やブルジョア階級對プロレタリア階級と言ふが如き對立觀念は認められない。それは凡ての對立を敵意とを超越する絶對の創造愛原理である。それは世界の凡ての民族が何れも其の處を得て安心立命し、差別ながらに平等なる國際生活を實現せしむることを目的とする。抑々階級的世界ボルシェヴィズムは功利的國際主

義とは共に個人主義と言ふ共通の温床より發生せるものである。従つて其の根幹となつて居るイデオロギーは同じ性質を有する。この道義に根ざさざる個人主義的イデオロギーは、東洋の「道」と本質を異にするものである。

東洋に於ける二大國民たる日本と中華民國とは、今迄自由主義的國際主義に禍せられて、苦々しき經驗を積んだ。更に其の後に至り、二國はボルシェヴィズムによりて思想的に甚だしく侵蝕せられ、其の強き害悪を被つた。今日日本と中國とは精神的に道義的に相提携し功利主義と階級主義を排除し、東洋本來の「道」に立ち歸らなければならぬ。今日我が國に勃興し來れる新しき皇道運動と、中國に起らんとする新しき王道運動とは、何れも時間的に觀て自由主義及びマルクス主義より後に來れるものであり、従つてより綜合的であり、より新鮮なるものである。實に、皇道と王道とは歪める個人主義的思想を検討し清算したる後に潑刺として顯現し來れる高貴なる精神である。されば此の點を文化的に闡明して、兩國の道義的提携を緊密にする

ことが今日の急務である。

孫中山先生の眞意は飽く迄も「道の邦」日本を提携して、東洋の眞の平和を確立することに
あつたことは疑ふべくもない。孫中山先生の十年祭に當り、兩國の識者が、こゝに深く想ひを
致し従前の悪因縁を一擲し、道義的觀點より相互に緊密なる協力を以つて邁進せむことを衷心
より希ふ次第である。更に此の機会に於て、眞面目なる中日文化諸團體がこの意味に於ける聯
繋を行はれんことを切望してやまない。

昭和十年三月七日印刷
昭和十年三月十日發行

定價 金拾圓

編者

日本文化聯盟

發行者

安藤 丞

發行所

東京市麹町區內幸町一ノ三
大阪ビル新館四階四五三號室

印刷人

東京市豊島區池袋二ノ九二四
片岡 正明 務

印刷所

東京市豊島區池袋二ノ九二四
株式會社 正明 會

發賣所

東京市麹町區內幸町一ノ三
大阪ビル新館四階四五三號室
日本文化研究所出版部
振替口座東京四八三八八番

終

